

## P3-46

## 東京医科大学における DREEM (Dundee Ready Education Environment Measure) を用いた学習環境調査の実施と学生による評価

(教育 IR センター)

○菰田 孝行

(医学教育学、教育 IR センター)

荒井 貞夫

(生物学、教育 IR センター専門委員会)

篠田 章

(英語、教育 IR センター専門委員会)

R. ブルーヘルマンズ

(公衆衛生学、教育 IR センター専門委員会)

井上 茂

(総合診療科、教育 IR センター専門委員会)

平山 陽示

(耳鼻咽喉科・頭頸部外科、教育 IR センター専門委員会)

大塚 康司

(医学教育学)

山崎 由花

【背景】 東京医科大学では、医学科学生の学習環境を評価するために、2013年度から DREEM による調査を実施してきた。さらには、2017年度より、他学も含めた共同研究として本調査を発展させた。本研究では、2018年度の東京医科大学における調査結果を分析する。

【目的】 Dundee Ready Education Environment Measure (DREEM) を用いて東京医科大学医学部医学科の学習環境の状況を把握し、本学の医学教育改善への視座を得る。

【方法】 2018年度の調査時期は2017年12月から2018年1月である。調査対象は、医学科1から6年生748名である。オリエンテーション実施時、授業後、試験終了後などの時間に、教育 IR センター員が教室に出向いて調査を実施した。全学年の回答率は、93.3%であった。DREEM の 50 項目 (例えば、「講義や実習に積極的に参加するように促される」) を記載した質問紙を配布し、「強くそう思う」から「全然そう思わない」までの5段階で評定させ、回収した。

【結果】 5段階の評定に「4」から「0」の得点を配し、

集計と分析を実施した。全学年の平均得点は、126.2点(50項目×4点=200点が満点)であった。さらに、学年と下位領域(学生の学習に対する認識、学生の先生に対する認識、学生の学問的な自己認識、学生の環境に対する認識、学生の社会的な自己認識、の5領域)を要因とした分析を実施した。学年では、2年生の得点が他学年と比較して高い傾向にあった。下位領域では、学生の社会的な自己認識が、他の下位領域より低い傾向にあった。

【考察・結語】 学年ごと、下位領域ごとに差異がみられ、学習環境に対する学生の認識の特徴が明らかになった。本調査の結果から、本学の長所と短所を認識し、教育環境の見直しにつなげて行くことが重要であると考えられる。

## P3-47

## 医学科導入を念頭に置いた看護学科におけるブレンド型反転授業の試み

(産科婦人科学)

○野平 知良

(医学教育学)

油川ひとみ、三苫 博

【緒言】 学生が習得すべき医学情報の加速度的増大に加え、臨床実習時間の確保により、従来の全体講義に代表される行動主義的医学教育では現在の医学教育に対応しきれなくなっている。その対策として産科婦人科学分野では、かねてより医学科・看護学科の系統講義にアクティブ・ラーニングの導入を検討してきた。その端緒として、我々は2018年度の看護学科講義でeラーニングを利用した自宅学習と対面型講義における知識の確認・問題解決型授業のハイブリッドであるブレンド型反転授業(Blended Flipped Classroom; BFC)を導入したので、看護学科での実践を通して認知領域での学習効果と今後の改善点を検討した。

【対象・方法】 本学看護学科2年生を対象に、従来の全体講義を行った2014~2017年の各年度とBFCを行った2018年度の学期末試験における平均点、最低点、得点率60%以下であった学生の割合を比較し、BFCの有用性を検討した。【結果】 2018年度の成績は2014~2017年の各年度の成績よりも有意に上昇した(平均点; 39.3, 68.4, 56.6, 57.2 vs 78.0,